

月刊菊池道場 第12号 ②

ファシリテーターとしての教師の在り方

【対談】 菊池省三道場長 VS 西村昌平岡山支部支部長

【文字起こし版】聞き取れない部分は、前後の会話から再構成、あるいは一部省略しています。ご了承ください。

菊池 今回、コロナ禍でこういう素敵なセミナーを開催していただきました。今回の開催にかける思いをお聞きしたいと思います。学校現場は、なかなか大変な毎日だと思います。こういう中で皆さんに集まっていたいただくということは、貫く思いもあるのではないかと思います。その辺りいかがですか？

西村 コロナ禍でオンラインの研修が増えました。いくつか研修を受けましたが、どうしても受け身になってしまいがちで、集中力が途切れてしまうということがあります。しかし8年ぐらやってきた道場で、今日も感じたのですが、対面で学ぶ楽しさ、菊池先生と直接会って、元気をいただく。この距離で、目の前でないと本当には受け取れないということがあります。

今日も皆さんと、師匠である菊池先生のお話を聞いていただけること、こういう場をつくれることが自分は幸せなんだ、楽しいんだということを改めて感じさせていただきました。オンラインも便利ですが、対面で行い、同じ時間、同じ場所であるということがこだわりながら今日セミナーを開催させていただきました。

菊池 教室もオンラインではなく対面です。今日も対面です。オンラインではない対面の一番の違いはどこだと感じていますか？

西村 今日のテーマでもある空気感ではないかと思います。

菊池 教室の空気をつくるのは教師だと思います。齋藤孝先生は、教師は発信地でもあるし、受信源でもあると言われていました。教師は、教室の空気を創るのに何割くらい役割を果たしていると思いますか。この答えは、一人ひとり違っていいですね。

西村 戒めですけど、10割だと思います。担任の先生によって教室の空気はガラッと変えられるものなので、逆に言えば、在り方を正していけば、どんな空気も変えていけるのではないかと思います。

菊池 教師の存在そのものが空気の10割を決めるとすると、その10割を占める教師の振る舞いの中で、何が一番重要だと思いますか？先ほどの実践発表で、笹部先生は「笑顔」だと言われました。

西村 菊池先生の授業を見ていて思うのは、子どもの背景を察するとか、どれだけ相手軸に、子どもの立場に立って思いやることができるかということだと思います。

菊池 単線の授業と複線の授業があります。小学校ではいろいろ遊びながら、経験しながら、「なるほど、そうだね」と授業を進めます。よく言われることですが、喋ったことが全くない人の結婚式でスピーチをしなくてはいけないとしたら、大人は、スピーチ本を手にして無理してでも話をつくってスピーチをします。子どもにそれをしなさいと言っても、絶対にできないですね。単線か複線か。教師のファシリテーションが必要となります。

西村 ゴールは決まっているわけなので、子どもと遊びながら、失敗感を与えないように、教師も子どもと一緒に楽しめるような多様性が保障されるようないろいろなアイデアを出し合いながら進めていきます。

菊池 教えるというよりもいろいろな意見を出していいんだよと言いながら、それらを価値付けしてあげ、失敗感を与えないようにして、よく考えたねと言いながら、教師も一緒に楽しみながら、多様性を保障するようにしていくといいのかなと思います。気づかせるということですね。そういうときに先生が気をつけていることはありますか。

西村 先ほど、「意見には正解がない」というお話がありました。自分の立場を決めて意見を自由に出せる。そして、意見が分かれてそれぞれが根拠をもとに話し合うようなことを出発点に始めるようにしています。

菊池 違いを出して自分の立場をまず決めて、そしてその理由をもとに話し合いをする。めあてと発問は違います。意見が分裂するような発問をもとに、立場を決めてその対話・話し合いをしていく。そういう話し合いの時間を、小学校では10分間、中学校では15分間やってくださいといろいろなところで言っています。10分や15分は確保できると思っています。

西村 自分の意見を広げるために、赤鉛筆や赤ペンを持たせて話し合い、自分と違う意見を見つけたらノートに書き込んでいく。そういうやり方で意見を広げていけば10分という時間も足りないくらいですね。

菊池 対話・話し合いの時間は、これからの授業に本当に必要だと思います。そこでは、ファシリテーターとしての教師の在り方が問われます。今回、「ファシリテーション」をテーマに掲げ、機関誌をまとめ、今日のセミナーを開催していただきましたが、改めてそれをテーマにされたお考えをお話してくださ

い。

西村 きっかけは昨年末、北九州で行われた菊池道場望年セミナーで、ファシリテーション業界の第一人者である加留部先生のお話をお聞きして、菊池学級のような豊かなコミュニケーションがあふれる授業をつくっていくには、教師のファシリテーション力が不可欠だということを改めて学びました。菊池先生の授業には届きませんが、少しでも子どもたちに届くようなファシリテーション力を自分自身がつけたい、分析したいという思いで始めたのがきっかけです。

菊池 岡山支部では、5年ほど前に「成長の授業」をテーマにしたセミナーをこの会場で開催していただきました。当時から、優れた実践報告をされていました。その後もずっと対話・話し合いのある授業をつくり出そうと取り組まれ、加えて、それらができる教師の在り方にまで一歩進んだところに踏み込んでいただいたのではないかと思います。その辺りのことをお話してください。

西村 この2・3年、私自身スランプというか、職場でも教室でもうまくいかないという時期がありました。このセミナーの開催自体、もう逃げ出したいなと思ったことも正直ありました。なんか、皆さんに顔向けができないなと思い悩む自分もいました。今日のbeとdoの話ですが、僕はやはりdoばかりに意識がいつてしまい、「何をするか」とやり方ばかりが気になっていました。菊池先生の学級にあこがれて「ほめ言葉のシャワー」をやっても、「どうしてこんなに子どもたちのことをほめられないのか」と悩みました。やはり自分はまだ一人ひとりの子どもに寄り添えないでいて、教師としてのbeの部分、在り方がまだだめと思いました。教室でも、職員室でもそうでした。もう一度、在り方を一からやり直す気持ちで向き合えないと、教室の子どもたちにも菊池先生にも、皆さんにも申し訳ないと思いました。

菊池 先日、ある中学校の校長先生とお話ししま

した。その学校に、自殺願望のあるお嬢さんが入学してきたそうです。危険な環境をなくすために学校の渡り廊下を全部閉鎖するなどしたそうです。朝方まで延々とお話したのですが、最後に必要なのは「教育は、愛だ」と本当に思いました。そのような子を守れないでどうするのかということをお話しました。学力テストなんかどうでもいいじゃないかと。その学校で、久しぶりに、教師の執念をみたような気がしました。愛、そして、執念。そして、どんな子に対しても絶対に諦めない。この3か月の間に私が学んだキーワードは、愛と執念と諦めない、ということです。西村先生の年齢だと、学校の中でも中間的な年齢で、期待され、責任も負う、一番大変な時ではないかと思えます。新採の先生のリーダーは、中堅・ミドル層ですね。中堅・ミドル層の先生のリーダーは、ベテランの方々です。ベテランのリーダーは管理職、校長先生です。全国的に、中堅・ミドル、ベテラン、管理職、校長先生方は、あまり研修をしていないのではないかと思います。言うだけ言う。存在そのものがリーダーではないと思いますね。スランプだったというお話でしたが、私も直接西村先生からお話を聞かせていただく中で、その大変さが分かりました。でも、校内でリーダーとして若い先生に指導され、存在を示すことによって学校を変えようとされていると思います。そして、このように外ではセミナーを開かれているわけです。皆さん、ここで西村先生に拍手を。

西村 結局、全部自分の問題だなと思います。自分に負けないで授業を変えていきたいと思っています。会場の皆さんも、大変な中お越しいただいていますので、諦めずに執念をもって頑張っていきます。元気をいただきました。

菊池 愛と執念と諦めないですね。山あり谷ありでございますけれども、それは授業だけではないでしょう。皆で高みに行けるように頑張りましょう。西村先生、岡山支部の皆さん、中國先生、福山支部の皆さん。スタンディングオベーションで感謝の気持ちを伝えたいと思います。皆さん本当にありがとうございました。大きな拍手を。